

学生はなぜ沈黙するのか： アクションリサーチ的な観点から

小橋 康章

はじめに

成城大学の共通教育の授業「情報社会論入門 a」「情報社会論入門 b」を実践するなかで、受講者である学生がしばしば沈黙してしまうことに気づいた。執筆者はこの授業を、教育の場であると同時に、授業という状況に伴う問題を発見し、解決策を考案、実践することで授業の質を維持改善するアクションリサーチの場でもありと考える、この共通教育論集の場をお借りしてその経過を定期的に報告している。

言うまでもなく、教室が静粛なのは必ずしも悪いことではない。とりわけ受講者の数十人以上の教室では講義以外の音声は邪魔になるばかりだろう。しかし比較的少人数の教室で、質問や回答、意見の表明といった形での発言を求められているといったいわば贅沢な環境にもかかわらず沈黙してしまうなら、学生にとっても講師にとってもせつかくの教育的環境を効果的に生かしていない残念な状況であると言ってよい。執筆者の経験ではこの沈黙の程度は年によって大きく違う。

執筆者にはこの沈黙を問題にしたい2つの理由がある。

第一に、執筆者が担当する授業の目的は受講者が情報社会について議論できるようになることにある（小橋, 2009, 2010）。議論は口頭で行われる場合も論文のような文書の形で行われることもあり、これを実践するには知識だけでなく技能が必要である。執筆者はこの授業を第一義的には技能習得の場だととらえている。口頭の議論の習得のためには学生が実際に声を出して質問したり、質問に答えたり、意見を表明することが不可欠である。また文書による発表も、口頭の議論の延長として考えることによって、受け取り手の立場を予測するといった態度を促

進することができる。学術的コミュニケーションの一つの手段である文献類を読み解くためにも、そうしたコミュニケーションの構造（小橋, 2012）を意識しつつ自らが発信者になることが有効ではないかと外国語学習（小橋, 2015）とのアナロジーから考えている。大学の教室を異世代間の相互理解の場（小橋, 2017）として構想しても、参加者が沈黙してしまつては運営が難しい。

第二に、実際はこちらの方がより本質的な理由ではないかと思われるが、「大学での学び、学問で大切なことは、未知の事柄、まだ解明されていないことを探求することなのです。学問では、明確な問題意識を持ち、自らの問いをたて、それを解明することが求められます」と東谷(2007, p.4) は述べている。大学での学習は手っ取り早く正解を知ろうにも知ることが出来ないような問題を「じっくりと考え、あれこれと調べて、解明していく」ことだとして。この学習は東谷に倣って「思考」と呼ぶこともできるが「研究」と呼んでも同じことである。すなわち、大学生は研究者共同体に正統的周辺参加(Lave & Wenger, 1991)する存在である。研究者の仕事とは常に新たな問いを産み出し、獲得した普遍的な知識を研究者共同体やひいては社会一般と共有することであるとすれば、沈黙しては仕事にならない。同じ理由で大学生も沈黙を破る訓練を受けるべきであろう。

たまたま比較的沈黙しがちなクラスに出会ったことを奇貨として行つた実験的な活動を報告したい。あえて研究者と研究対象を峻別する客観的なアプローチをとらずアクションリサーチを選んだわけだから、沈黙しがちな学生達自身も調査協力者として参加してもらうことにした。

1. 問題

授業中に、発言を求められているにもかかわらず学生が沈黙してしまうことがある。学生が沈黙してしまうと何が具合が悪いのかについては前節で述べた。

沈黙の原因は何か。

対策はあるのか。

この二つがこのノートで提起する問いである。

2. 方法

2018年7月12日、情報社会論入門aを受講する学生17名の参加により、発言を促されている場合でも学生が沈黙する理由と原因をの内部探検(自らの考えの熟考と記述)と相互インタビューを実施し、論文アウトラインにまとめさせた。この結果を参照しつつ、アンケートの設問を用意した。

2018年10月18日、出席していた20名の学生を対象に無記名のアンケート調査を実施した。

表1. アンケートの設問:教室で学生が沈黙する理由

- 1 自分に視線が集まるのがいや
- 2 静かな場で声を発することに抵抗がある
- 3 知らない人がいる中で発言することに抵抗がある
- 4 先輩を差し置いて発言することに抵抗がある
- 5 誰かほかの人が発言してくれると思う
- 6 自分が授業を良く理解していないことが他人にわかってしまう
- 7 間違っことを言ってしまうのが不安
- 8 まずほかの人の発言を聴いてからにしたい
- 9 質問が難しいので理解できない
- 10 答を間違えたら恥ずかしい
- 11 発言できる環境ではない
- 12 うまく言葉で表現できない
- 13 質問の意図がわからない
- 14 周囲の目が気になる
- 15 自分の答の適切さに自信がない
- 16 一対一ならよいが大勢の中で話すのはいや
- 17 周囲の人の行動に合わせたい
- 18 誰かが答えるから自分が答えなくても良いのではないかと思う
- 19 全体に投げかけられた問いに自分が答える必要はない
- 20 誰も発言しないのに自分だけ声を出すのはいや
- 21 自分の意見をうまく伝えられる自信がない
- 22 良く知ったもの同士のグループだったら発言しやすい
- 23 参加者の人数が多すぎるから
- 24 発言しなくても都合の悪いことは起きないから
- 25 発言しても得にならないから
- 26 問われた内容を聴いていなかった
- 27 既に出た他人の答と自分の答が同じだった
- 28 教室では静かに先生の言うことをよく聴きたいから
- 29 沈黙するということについて考えてみたことがなかった

設問は表1に示す「自分に視線が集まるのがいや」「静かな場で声を発することには抵抗がある」など29の表現に対して自分に当てはまるかどうか、「このクラスの多くの人に当てはまる」かどうかを「はい」「いいえ」の二択で聞いている。一般にアンケート調査の目的は様々だが、ここでは対話の材料を提供することを目的にしている。

2018年10月25日、出席者にアンケートの集計結果をまとめた表2を配布し、「学生が授業中に沈黙する本当の理由・原因は何か」というタイトルで論文アウトラインを書いてもらった。

これらのほか講師である執筆者自身の観察も適宜記録にとどめる。

3. 結果

ここではアンケート調査の結果を中心にまとめる。

3.1 発言の積極さの評価

(1)「あなたは教室で積極的に発言するほうですか？ 100点満点だと何点くらいになるでしょう？」という問い、(2)「この授業の学生たちは教室で積極的に発言するほうですか？ 100点満点だと何点くらいになるでしょう？」という問いを設定してみたところ、20名の授業出席者中19名が回答しており、一名のみが無回答だった。自分自身の発言の度合いの評価である(1)の点数は0点から80点の間に広がっており、平均が28.3点とかなり低いが、クラス全体に関する評価である(2)に至ってはこれをさらに下回り、19.8点であった(レンジは0点から50点)。

回答者を(1)の点数の大きい者から小さい者へと並べ替え上位7名を「S1-7」と呼ぶことにする。自己評価点は35点から80点であり平均値は58.6点、相対的に自己評価の高い群ということが出来るだろう。7名は全体20名の約3分の1の人数である。これ以外の回答者を「S8-20」とし、自己評価0点から30点の者(平均値は10.7点)と、さらに積極さ評価の問いについてのみ無回答だった1名もこの群に入れた。

自己評価の高い「S1-7」群の特徴はクラス全体への評価が自己評価より低い点にもある。例えば発言の積極さ 80 点と自己評価の最も高い学生は、自分も含めたクラス全体の積極さを 10 点としている。これに対して残りの 13 名のうち 11 名はクラス全体に対する評価より自己評価の方が低い。「S1-7」群のクラス評価の平均は 16.4 点、「S8-20」群のクラス評価の平均は 21.8 点である。

3.2 沈黙の利用と原因に関するアンケート

「自分に視線が集まるのがいや」「静かな場で声を発することに抵抗がある」など 29 の表現へのアンケートの結果を表 2 にまとめた。表現が自分自身に当てはまる（「はい」）という回答が多いものから降順に並べ替えてある。

3.3 学生へのフィードバックから

上記のアンケートの集計（表 2）を学生にフィードバックしたうえで書いてもらった「学生が授業中に沈黙する本当の理由・原因は何か」という論文アウトラインからいくつかを取り上げる。表現を多少手直ししている個所もある。

- － 発言を積極的にする人はそもそも他人の目線を気にしない。逆に積極的に発言しない人は気にしているといえる。皆で他人を意識させないような環境を作っていけば沈黙は減ってくると思う。例えば教室の電気を消して授業をしてみるとか。
- － 「自分は積極的だ」と答えた者は自分以外の者に対し消極的だと答えたという結果になったが、それなら前者が普段もっと発言をしてもよいのではないか。
- － 「全体に投げかけられた問いに自分が答える必要がない」と答える人が（発言に積極的なはずの）「S1-7」群に 71% もいたことに注目したい。この問いに「はい」と答える人の自己評価が高いというのはどういうことだろうか。私は意識と行動が乖離していることが学生が沈黙してしまう原因だと考える。
- － 目立ちたくない、他人が何もしていないのに自分だけ違うことをして、浮いた存在になり嫌われるのは嫌だという気持ちがある。
- － クラスの人たちも自分と同じく、知らない人の中であると発言しにくかった

表2. 回答の集計:教室で学生が沈黙する理由

以下の29の問いについて、(1)自分に当てはまるか、(2)クラスの学生全員に当てはまるか、を「はい」「いいえ」いずれかで答えた

番号	設問	(1)自分に当てはまる 「はい」と答えた人数、同%				(2)このクラスの多くの人に当てはまる 「はい」と答えた人数、同%							
		全体	s1-7*	s8-20	全体	s1-7	s8-20	全体					
22	良く知ったもの同士のグループだったら発言しやすい	18	90%	7	100%	11	85%	20	100%	7	100%	13	100%
5	誰かほかの人が発言してくれと思う	17	85%	6	86%	11	85%	19	95%	6	86%	13	100%
18	誰かが答えるから自分が答えなくても良いのではないかと思う	16	80%	6	86%	10	77%	18	90%	7	100%	11	85%
15	自分の答の適切さに自信がない	15	75%	5	71%	10	77%	17	85%	7	100%	10	77%
10	答を間違えたら恥ずかしい	14	70%	5	71%	9	69%	15	75%	6	86%	9	69%
16	一対一ならよいが大勢の中で話すのはいや	14	70%	3	43%	11	85%	18	90%	7	100%	11	85%
17	周囲の人の行動に合わせてたい	14	70%	4	57%	10	77%	18	90%	6	86%	12	92%
27	既に出た他人の答と自分の答が同じだった	14	70%	4	57%	10	77%	17	85%	3	43%	11	85%
2	静かな場で声を発することに抵抗がある	13	65%	4	57%	9	69%	14	70%	7	85%	10	77%
8	まずほかの人の発言を聴いてからにしたい	13	65%	4	57%	9	69%	17	85%	6	86%	11	85%
20	誰も発言しないのに自分だけ声を出すのはいや	13	65%	4	57%	9	69%	20	100%	7	100%	13	100%
1	自分に視線が集まるのがいや	12	60%	2	29%	10	77%	17	85%	6	86%	11	85%
3	知らない人がいる中で発言することに抵抗がある	12	60%	2	29%	10	77%	17	85%	6	86%	11	85%
7	間違ったことを言うってしまわないか不安	12	60%	4	57%	8	62%	16	80%	7	100%	9	69%
24	発言しなくても都合の悪いことは起きないから	12	60%	4	57%	8	62%	15	75%	4	57%	11	85%
29	沈黙するということについて考えてみてみたことがなかった	12	60%	4	57%	8	62%	15	75%	5	71%	10	77%
19	うまく言葉で表現できない	11	55%	5	71%	6	46%	12	60%	5	71%	7	54%
12	全体に投げかけられた問いに自分が答える必要はない	10	50%	5	71%	5	38%	16	80%	6	86%	10	77%
21	自分の意見をうまく伝えられる自信がない	10	50%	2	29%	8	62%	14	70%	4	57%	10	77%
14	周囲の目が気になる	9	45%	1	14%	8	62%	16	80%	5	71%	11	85%
9	質問が難しいので理解できない	8	40%	3	43%	5	38%	8	40%	1	14%	7	54%
11	発言できる環境ではない	8	40%	4	57%	4	31%	11	55%	4	57%	7	54%
23	参加者の人数が多すぎるから	8	40%	2	29%	6	46%	10	50%	1	14%	9	69%
26	問われた内容を聴いていないかった	8	40%	2	29%	6	46%	13	65%	2	29%	11	85%
28	教室では静かに先生の言うことをよく聴きたいから	7	35%	1	14%	6	46%	9	45%	1	14%	8	62%
6	質問の意図を良く理解していないことが他人にわかってしまう	5	25%	1	14%	4	31%	8	40%	2	29%	6	46%
13	質問の意図がわからない	5	25%	1	14%	4	31%	8	40%	2	29%	6	46%
25	発言しても得にならないから	5	25%	1	14%	4	31%	9	45%	1	14%	8	62%
4	先輩を差し置いて発言することに抵抗がある	4	20%	1	14%	3	23%	5	25%	1	14%	4	31%

*1 S1-7は「あなたまたは教室で積極的に発言するほうですか? 100点満点だと何点くらいになるでしょう?」という問いへの答が35点以上だった回答者。
S8-20はそれ以外の回答者。

り、発言に自信をもてなかつたりすることがわかった。これらの結果はこの授業だけでなく多くの授業にも通じることだと思う。

- －（多くの賛同を集めた答えの中に）自分自身の素質ではなく、周囲の環境のせいで沈黙してしまうという意味のものいくつもある。これらの割合が高くなることからわかるように、周囲の環境を改善することによって、沈黙は改善されると考える。
- － 自信のない人ほどまわりの目などをきにしてしまい、発言しにくいのではないかと推測される。解決するには生徒（ママ）ひとりひとりが自信を持てるような授業内容にするのが良い。始めにグループなどで話し合い、意見をまとめて自信をつけてから発表させるなど。
- － 自分の理解度が追いついていないから授業中に発言しないのではなく、自分でなくても誰かが答えるという気持ちが強いために発言しない人が多いと思う。また他人が発言することにも関心は低く、その発言が間違っていようがいまいがどうでもいいと感じる人が多いと思う。つまり自分も他人に関心がないのにその自分が発言するのは嫌という人が多いと思う。

4. 考察と結論

授業中に、発言を求められているにもかかわらず学生が沈黙してしまうことがある。全体の3分の1は自分が少なくともクラス全体の水準よりは積極的に発言していると考えているが、残りの3分の1は自己評価が100点満点中の30点以下であり、自分自身の沈黙を自覚している。以下が上記の調査結果と執筆者自身の観察をもとにしたその原因についてのとりあえずの結論と対策である。読者のご意見ご批判を歓迎する。

「良く知ったもの同士のグループだったら発言しやすい」という表現には全体の90%が賛成しており、ある種の「客観的事実」としてとらえられているが、自分を積極的に発言する方だととらえている「S1-7」ではこれとよく似た表現である「知らない人がいる中で発言することには抵抗がある」者は29%に過ぎず、個人差が大きい可能性がある。

自分は積極的に発言するという学生が数人おり、少なくともクラス全体よりはより積極的に発言するという学生が全体の3分の1程度いるにもにもかかわらず、現実にはこの学生たちも含めて沈黙してしまうことがある。

「誰かほかの人が発言してくれると思う」「誰かが答えるから自分が答えなくても良いのではないかと思う」という表現はどちらにも全体の80%前後が賛成しているだけでなく、「S1-7」でも2,3番目に賛同者が多い。自分は「自分に視線が集まるのがいや」とか「知らない人がいる中で発言することに抵抗がある」とかいうことはない（それぞれ29%、いっぽう「S8-20」群では77%）のだが、「全体に投げかけられた問いに自分が答える必要はない(71%)」ので、あえて自分（ばかり）が発言することはない、という気分が感じられる。沈黙の原因の一つではないかと思われる。つまり発言することが良いことだという自覚がなく、発言してクラス全体に貢献しようというモチベーションが欠けているとって良さそうである。また「発言できる環境ではない」という表現に半数以上（57%）が賛同しているのも「S1-7」の特徴で「S8-20」群の31%と比較される。

これらに続いて「自分の答の適切さに自信がない」「答を間違えたら恥ずかしい」も全体に賛同が多く（それぞれ75%、70%）、「S1-7」「S8-20」群間のパーセンテージの差も小さいことから、高等学校までの正解志向の教育の影響が推測できる。これも沈黙の原因の一つではないか。

いっぽう自分がクラス全体の中でも発言をしない方だと自覚している「S8-20」群は、「S1-7」でも賛同者が多い「誰かが答えるから自分が答えなくても良いのではないかと思う」「自分の答の適切さに自信がない」などのほか、「一対一ならよいが大勢の中で話すのはいや(85%)」「自分に視線が集まるのがいや(77%)」「知らない人がいる中で発言することに抵抗がある(77%)」「周囲の目が気になる(62%)」としている。また「うまく言葉で表現できない」が71%、「自分の意見をうまく伝えられる自信がない」が62%と、表現力についての自信のなさが「S1-7」群（それぞれ46%、29%）よりかなり高い水準なのが気になるところである。

アンケートの設問の準備に活用した事前の調査からは「先輩を差し置いて発言することに抵抗がある」「発言しても得にならないから」「自分が授業を良く理解していないことが他人にわかってしまう」「質問の意図がわからないのではない

か」といった指摘もあり、気になっていたが、全体としてみると25%までの賛同に留まっている。ただ「(講師の) 質問が難しいので理解できない」については40%が賛同しており、これを多いとみるか少ないとみるかは評価のわかれるところだろう。理解できるよう質問の表現を工夫するのは講師が心がけるべきことであるのに間違いはない。しかし新井(2018)の大学生数学基本調査や中高生の基礎的読解力調査の結果が示すように若者の読解力や聴解力が低下しているのであれば由々しい事態である。また「発言しても得にならないから」は自分自身に関してはたしかに25%の賛同にすぎないが、「S8-20」群がクラス全体を評価する際は62%が賛同していて、こうした傾向が事前調査の回答に反映されたのではないかと思われる。

これらのほか自分にはあてはまらないがクラス全体には当てはまるとされる表現がいくつかある。「誰も発言しないのに自分だけ声を出すのはいや」「周囲の人の行動に合わせたい」は100%、92%がクラスに当てはまるとしており、「問われた内容を聴いていなかった」「周囲の目が気になる」も「S8-20」群がクラス全体の評価をする際は85%の賛同を得ている。こうした認識が「周囲の人の行動に合わせたい(70%)」傾向と結びついた時どのように実現するのかは気になるところである。

沈黙する理由や原因には当たらないが「沈黙することについて考えてみたことがなかった」かどうかという設問を加えたところ、全体の60%がなかったと答えており、そもそも沈黙が不都合なこと、あるべきでないことといったようには意識されていないことが伺われる。事前調査の段階でこのような回答があり、講師である執筆者としてはやや驚いた記憶がある。

以上の考察から得られる結論は調査の性質上まだ仮説ではあるが、

沈黙の原因：

- (1) 発言することが良いことだという自覚がなく、発言してクラス全体に貢献しようというモチベーションが欠けている。
- (2) 正解を出さなくてはならないとの思いが強く、自信のない答えを表明したがる

- (3) よく知らない人の前で発言し、注目されるのが嫌な学生が相当数いる。
- (4) 言語的な表現力に自信のない学生が相当数いる。

上記のような原因に関する認識が適切なものであれば、

沈黙への対策：

- (1) 若干の困難を乗り越えてでも発言すること自体が良いことだと徹底させる。
- (2) 正解を出す必要はなく、いわば仮説を提出してクラス全体に貢献することが望ましいことだと徹底させる。
- (3) 他者の発言に感謝し、ポジティブに評価し、励ます文化を醸成する。
- (4) 主張や質問を適切に表現する技能が身に着けられるようさらに工夫する。

などがまず検討すべき解決の方法であろう。

参考文献

- 新井紀子 (2018), 「AI vs. 教科書が読めない子どもたち」, 東洋経済新報社.
- 小橋康章 (2009), 情報社会論入門の構想. 「成城大学共通教育論集」, 2, pp.153-164
- 小橋康章 (2010), 情報社会論入門の実践. 「成城大学共通教育論集」, 3, pp.143-154
- 小橋康章 (2012), 深層構造の可視化による学術コミュニケーション教育の促進の試み. 「成城大学共通教育論集」, 5, pp.141-154
- 小橋康章 (2015), 外国語コミュニケーションを可能にする「場のデザイン」: 英語を例とした探索的実験. 「成城大学共通教育論集」, 8, pp.79-90
- 小橋康章 (2017), 異世代間の相互理解の場としての大学の教室. 「成城大学共通教育論集」, 10, pp.143-150
- Lave, J. and Wenger, E. (1991). Situated learning: Legitimate peripheral participation. (Cambridge University Press)
- 東谷護 (2007). 「大学での学び方: 『思考』のレッスン」, 勁草書房.

謝辞

2018年度の「情報社会論入門 a」「情報社会論入門 b」の授業に出席し、調査に参加してくれた受講者に感謝します。